

第2回（仮称）滋賀県子ども・青少年総合計画策定協議会 開催概要

平成21年（2009年）8月27日（金）9：30～12：00

大津合同庁舎7 A会議室

委員の出欠

出席委員：安部委員、井深委員、小田委員、葛口委員、小林委員、鹿田委員、高岸委員、
高橋委員、中西委員、中村委員、野田委員、船川委員、松元委員、山本委員、
渡部委員 計15名
欠席委員：櫻葉委員、福永委員、森口委員、 計3名

会議の概要

2 議 題

（1）各検討会における検討結果について

各検討会の検討結果を各座長から報告書に基づき説明

- ・子育て支援検討会の座長の渡部委員から資料1 - に基づき報告
- ・青少年自立支援検討会座長の安部委員から資料1 - に基づき報告
- ・社会的養護検討会座長の野田委員から資料1 - に基づき報告
- ・ひとり親家庭支援検討会座長の高橋委員から資料1 - に基づき報告

報告書の内容に関する質疑応答

（2）報告事項

県政に対する子どもの意見・提案について

- ・子ども県議会で出された子どもたちの質問について、資料1 - に基づき事務局から説明

青少年の社会的自立に関する意識調査について

- ・インターネットを利用して実施した「青少年の社会的自立に関する意識調査」の単純集計結果について、資料1 - に基づき事務局から説明

（3）（仮称）滋賀県子ども・青少年総合計画の基本理念等について

基本理念等について

- ・第1回策定協議会での議論を整理しつつ、基本理念や施策の基本的視点等について、資料2に基づき事務局から説明

骨子作成に向けた計画内容の検討について

- ・資料2に基づき事務局から説明

質疑応答・意見交換

委員からの意見（まとめ）

策定協議会終了後に提出いただいた意見も含めています。

1 計画の基本理念、基本的考え方について

【基本理念について】

- ・基本理念に掲げる社会の形に近づくためには、親の責任、地域の責任、さらには行政の責任を再認識、再確認する必要がある。それぞれが責任を果たすことで、今の状況が変わってくる。
- ・基本理念の解説について、一つの文の内容が盛りだくさんで読むのに疲れる。誰もが読みやすい文章に変える必要がある。
- ・この基本理念のそれぞれの字句に盛り込まれた深い内容というのは、説明を聞くと理解できるが、基本理念の2行だけが表に出た時、果たして、この字句だけではそうした深い内容までを読み取れるか疑問である。
- ・子どもや若者だけが成長して、親の世代、社会、地域は、与える立場だというスタンスではなく、子どもや若者と一緒に、親も育ち、地域も育ち、社会も育つというニュアンスが、基本理念から読み取れるといいのではないか。
- ・基本理念については、「子どもの声、若者の姿が響く滋賀」とか、「見かけられる滋賀」というふうに、たくさん子どもがいる姿というのを思い浮かべられるような表現にしたらどうか。
- ・「次代を担う子ども・若者が輝く社会の実現」とあるが、「社会」というと他人事になってしまうので、「滋賀の実現」とすれば「真剣に考えるぞ」という気持ちが出てくるのではないか。
- ・子育て検討会報告書にある「気づきと共感」や「絆づくり」という言葉が入っているといい。
- ・若者の立場から言うと、「地域力」が何なのかわからない。地域で行われている活動も若者にとってすごく遠い存在に感じる。地域は「何をしているのか」、「私たちに何をしてくれるのか」、そもそも何を指して「地域」というのかが分からない。

【県の姿勢の表現について】

- ・計画をつくって、明るい未来や夢・希望をめざすということになるのだろうが、一方で、それをめざすベースラインすら保障されてない家庭がある。そういう状況を、最低限、ベースまで押し戻す支援については、より積極的に進めるという意味合いを、全体の基本的な部分で読み取れるようにする必要があるのではないか。
- ・社会的養護など、県がストレートに責任を持つべきところについては、その姿勢を示す必要があるのではないか。

2 骨子作成に向けた計画内容（具体的施策等）について

【子ども・若者】

- ・児童虐待の通告件数が増える中で、対応しきれない状態が現場ではずっと続いている。これは非常に大きな問題だと思う。
- ・子どもや若者が生きる力を身につける方向に持っていかないといけない。
- ・若者が地域活動に参加したいときに、どのようにすればその活動に関わっていけるか、地域の手助けが欲しいときに、どうやったら手助けを得られるのかということについて、若者に知る機会を与えて欲しい。
- ・若者から地域がどのように見えているかということ踏まえて、若者を地域にどうやってリンクさせていくのかを考えて欲しい。
- ・課題を抱える青少年への支援という項目では、不登校とニートと非行を同じ括りにしている。まわりの社会環境や家庭環境等から、青少年自身が自分の力ではなかなか解決できない課題であるということから、一つにまとめているのだと思うが、非行に関しては、社会全体がまだそのような認識になっておらず、異論もある。本人の責任という色合いが強い認識もあるので、留意した方がいい。
- ・「不登校やニート、非行などを抱える若者へのきめ細やかな対応」とあるが、「抱える若者」という表現から、書き手側が、不登校やニート、非行などをどのように位置付けているのかという意識が垣間見える。不登校やニート、非行などについては、特殊でデリケートなものであるという認識からすると、もう少し表現を検討する必要があるのではないか。

【地域】

- ・地域力をどうやって育てていくかが大切だと思う。当事者に一番近いのは地域であり、家族に次に近い存在である地域が、子どもを助け、育てて、教えていく環境を作っていかなければならない。地域の蘇生が必要である。
- ・効率化を進め、無駄を省いていった結果、昔あった余裕という「のりしろ」がどんどん減り、隣同士くつつかなくなってしまった。弱い部分にそのしわ寄せが来た結果、少子化が進んでいるのだと思う。企業や学校など様々な主体が一緒になって、今の時代にあった地域の「のりしろ」を新しく作り直す必要がある。
- ・子どもや若者をいかに地域の原動力にするのかということが大切だと思う。各地域で相当な意識の差があるので、どういうことを地域で考え、何を実行して欲しいのかということ具体的に発信しないと、場の提供や機会の提供だけに留まってしまい、より広くて、強いネットワークが形成されるまで至らないのではないかと。

【ひとり親家庭】

- ・「ひとり親家庭」に「父子家庭」が入るということを見えやすい形で表現すると思う。

【施策のあり方】

- ・現状において、それぞれの分野に、必要な力量を持つ専門的な人材が必要な数いるのかが疑問である。この総合計画を着実に実行していくためには、現場できちっと実行できる人を育成していく必要があるのではないか。
- ・ハードとソフトのみならず、「ハート」も計画の中に盛り込んで欲しい。
- ・横の連携、横のつながりをどのように築いていくかということを考える必要がある。計画を作る時からそういう点を考慮しておかないと、具体的な実践の際につながっていきにくいのではないかと思う。
- ・計画の策定はスタートでしかない。現場・現実でどのように実践し、結果を出していくかが肝要である。いくら立派な理念を作っても、それが実践されなければ意味がない。
- ・「切れ目のない支援」について、本当に支援が必要なところと必要でないところを区分けしてほしい。財源が限られている中で、何でもかんでも「支援」ということはではないはず。今、早急に処置をしなければならないもの、しばらく置いておいてもいいもの、あるいは支援しなくてもいいものの仕分けが必要である。子どもや若者の自立の問題も考えて欲しい。

【滋賀らしさ】

- ・計画の具体的施策について、あまりにも総花的な感じがする。滋賀県で特に問題になっていること、課題になっていることから始めるということ、どこかに謳う必要があるのでは。また、「目から鱗が落ちる」ような内容も欲しい。
- ・計画に「滋賀県らしさ」が必要であるとのことであるが、どんな県がやっても、取り組みの仕方がある程度が似てくるのはやむを得ないと思う。滋賀県らしさを発揮するのであれば、例えば、「淡海発三方よし、子育て支援から自立まで」というように、タイトルや副題のつけ方を工夫したらどうか。そうすれば、滋賀県が発信しているというが理解してもらえるのではないか。

【その他意見】

- ・各検討会から出された報告内容が、どのようにつながっていったら、どの施策で活かされていくのかというところが、読み取れない。
- ・地域の子どもを育成していく活動というのは、地域の後継者を作っていく活動であるが、指導者育成も含めて、その環境を整えるというのは非常に難しい。ハード面でいうと、滋賀県はすごく限られている。県においては、子ども・青少年総合計画の策定を議論する一方で、青少年を育成していく施設の存廃についても議論されており、矛盾を感じる。